

ビートを鳴らせ

あんな

「楽しいわ、とっても楽しい」夫人は言った。「美しいわ、万華鏡みたい」とも言った。興奮した夫人の真っ赤な口紅のラインが唾液で歪んだ。色とりどりの照明の光と様々な形の影が重なってできた模様があちらこちらで回転している。ボクは赤いベルベットのソファに座って熱気とアルコールで霞むフロアの様子を眺めた。人々は音楽と一緒に昇天したまま動物実験でへろへろになったネズミみたいにとただ同じ動きをくり返している。

*

「私も踊りたいわ」と言って立ち上がり、見たこともないダンスを踊り出したこの女性は、ボクの遠縁の親戚であるという。中年で小太りの、でもどこか品のある雰囲気。漂わせ、ヨーロツパかどこかの血が入っているような彫りの深い顔は自分には似ても似つかなかった。今まで一度も会ったことはないし、話す言葉も変な訛りがあって馴染めなかった。どうやらもう死んでしまった夫がここへとても来たがっていたと言うが、そんなことはボクにとってどうでもいいことだった。ただ行き当たりばったりに目的もなく生活する人間ばかりのこの街で、一体どこに連れて行けばいいのか検討もつかずに、ただ思いつくままにその辺の

ダンスホールに入ったのだった。それに、本人は気づいていないだろうが、夫人の表情にはまだうっすらと**かなしみ**の断片が張りついていて、ボクは居ても立ってもいられない気分になって、少しでも夫人の気分を晴らそうとしたのかもかもしれない。未亡人をもてなせるほどの気の利いた振る舞いも持ち合わせていなかったし、いきなりこんな派手な場所に連れてきて気を悪くするんじゃないかと思っただけ意外にも夫人は楽しんでるようだった。泥酔して床にへばりついたまま足をバタバタと動かしていた年齢不詳の男が突然立ち上がり激しく腕を振って踊り出し、夫人の肩を抱いてくるくると回りながらDJの横のステージに上がった。突然照明が変わり、一心不乱に踊る二人の姿をシルバーの強烈な光が火花が散るように二人の顔の上に飛び散った。夫人の長く細かいウェーブのかかった金髪がキラキラと舞っている。DJはそんな二人を見て興奮したのか目配せをしてレコードを片手でぐるりと回しながら取り出し「とっておきの曲を二人に！」とマイクに向かってがなると、低音が心臓を上下に揺さぶるような曲をかけた。すると男は夫人を両腕で抱えるように持ち上げ肩に担いで曲に合わせて体ごと揺さぶり始めた。それを見てフロアにいた客の一人が煽るように甲高い声でフーッと叫び、それにつられて多くの客が取り憑かれたように頭を振って腕を回しながらさらに激しく踊り出した。夫人は恥ずかしそうに顔を覆っていたが、しばらくするとこちらを振り返って困った顔で笑いながら手を上げた。近くにいた十代の細くなよなよした若い男が「君は、これやらないのかい？」と指で丸を作ったボクの顔の前に差し出しながら不思議そうな顔で言ってきた。それが一体何のことかわからなかったので黙った

ままその若者の顔を見てみると、突然若者は手のひらに小さな小さな丸い機械のようなものを乗せて口に放り込むと、手に持っていた瓶に入った透明な液体と一緒に口の中に放り、飲みこんで見せた。「知らないのか？　こうして体の中からビートを鳴らすんだ。ひとつあげようか？」丸い機械をひとつ受け取りそっとポケットの中にしまった。よく辺りの様子を観察してみると、強烈な音圧を発しているらしい人物が踊り出すと周囲の数人が吸いこまれるように近づき、動きをコントロールできなくなってぶつかり合ったりはまた離れていく、という動きをくり返していた。一人、また一人と強烈なビートに身を任せながら体の輪郭がなくなってしまうように混然一体となって踊り続ける様子があちこちに見えた。照明はそのような光景さえもまるで風景のように煌びやかに照らし続けている。ちやりちやりと薄まったラムコークの氷を指で掻き回しながらその様子を眺めていると、夫人が真っ青な顔をしてステージから降りて走ってくるのが見えた。「あの男、急に倒れたわ」ステージでさっきまで暴れていた男はすっかり体の一部が抜け落ちてしまったようにだらりと腕を広げて横たわったまま床の上を転がっていた。骨と骨がぶつかり合う鈍い音が聞こえる。まるでやせ細った猫のように関節を曲げて前に手を伸ばしてもがき、そのたびに男がつけているシルバーの指輪がかちやりと鳴った。しばらくすると少しづつバランスを崩してステージの前方に移動し、ついにはステージからずるずると落ちて動かなくなった。

*

「人づてにここのことを色々聞いて、なんとなく来てみたくなっちゃって。夫が死んでから、家も売り払って、ずっと旅に出ていたの。思いきってあなたを頼って来てみて驚いたわ。こんな街は今まで見たことがないわ」

*

緑の車が一台ボク達の前に止まって窓が開くと、口の周りにいっぱいピアスをしたスキンヘッドの男が「だめじゃないか、なんだか表情が冴えないな」と言って後部座席から何かを引っ張り出しこちらに投げて去っていった。それは一枚のレコードだった。ボクは鞆にレコードを突っ込むと、通りを横断する千鳥足の女達や路上に座り込んで抱き合ったまま動かないゲイのカップルを避けながら夫人を連れて予約を取っておいたホテルまで早足で歩いた。極端に暗いロビーに目が慣れずに数度まばたきをしてからカウンターで名前を告げ鍵をもらうと、夫人を伴って暗く狭いレストランで遅い夕食を食べた。どこに行っても言えることだが従業員が数人しか見当たらず、その上客が四方八方から入ったり出たりをくり返すので、勘定をもらうのを忘れていたり、まったく違う料理が運ばれてきてそのまま食べてしまったりしているが、皆が一樣に満足そうな顔をしている。それは店員も同じで、どこかのテーブルにいたまま酒を飲み出す店員さえいる。混沌としているようでいて、ボクにとっては見慣れた光景だった。そんな光景を目を丸くして見渡している夫人をよそに、誰かが頼んだらしいチーズの盛り合わせをつつき、冷めたオムレツを口に押し込むと、夫人に鍵を渡した。「明日また迎えに来ます」そう

告げると、夫人は熱を持って紅潮した頬を動かしながら「あら、いいのに、大丈夫よ」と手を振りながら上機嫌そうに残りのワインを飲み干した。ボクは口に手を持っていった。夫人の耳元で「この街の人は**かなしみ**を嫌います。作り笑顔で歩いていたら、この街の人達がほっときませんよ」と呟いた。夫人は呆気にとられたようにサラダに伸ばした手を止めて「あら、平気なのに」と言って口をナプキンで拭いた。赤い口紅はすっかり取れてしまって乾いた血色の悪いくちびるが小さく震えていた。それから夫人は慌てたように「私、まだ**かなしい**のかしら？」と言って覆うように両手で顔を包んでから「どうすればいいのかしら」とまるで助けを呼ぶ物乞いのような調子で言った。ボクはそんな夫人が何故か可笑しく思えてきて思わずふふっと、笑ってしまった。

*

通りには人が溢れていた。一人の腰の曲がった老人が籠に溢れんばかりの花を詰め、あちらこちらにまき散らしながら歩いているのが見えた。花を踏みしめながら歩いていると黙々と新聞を燃やしている青年がこちらを見て「一緒にコーヒーを飲みませんか」と声をかけてきた。青年は折り畳式の小さい椅子をガレージから出してきて路肩に並べてからポットになみなみと入ったコーヒーを持って来た。その辺にあった段ボールをひっくり返してカップを並べ、即席のカフェを作ってくれた。「最近仕事が忙しくて、なかなかこうやってゆっくりする時間がなかったんだ」青年は束になって置かれている新聞の山を指差しながら言った。

「新聞記事の処分の仕事はかなり大変だと聞いたことがあります。最近**かなしい**ニュースが多いみたいですから。人々がこうして何も知らずにすむのもあなたのおかげですね」青年は満足そうに「とてもやりがいのある仕事だよ」と言っている。街にあるすべての新聞社やラジオ局にもっと厳しく情報を制限するよう求める運動をしている、という話を一時間以上も話して聞かせてくれた。熱心に語った後で青年は溜息をひとつついて「いつかはこの街も変わってしまっただろうな」とか細く小さな声で言ってから隠れるように家の中に戻ってしまった。

*

アパートに帰宅し、鞆を放り投げてベッドに横になってから、鞆からはみ出ているレコードの存在を思い出し、祖父から譲り受けた古いレコードプレーヤーに乗せてみることにした。レコードの表面を念入りに拭きセットしてから針をゆっくりと落とすと数秒後にプツプツとノイズ音が流れ、小さく破裂音が鳴った後、ぷつぷつと音が切れレコードが止まってしまった。よく見てみると針が折れてしまったようだった。

*

死んでいるのかいないのかよくわからない人々の間をむせかえるような花と煙の匂いが漂い、頭をぼうっとさせた。窓を開けて大音量でオペラを流している車が信号が止まった通りを往復し、壮大な音楽が耳の奥で近づいたり遠ざか

ったりしている朝だった。ホテルのロビーで待つ夫人の元へ駆け寄ると見知らぬ男と楽しそうに話していた。「この方、昨日ここに来て今から面白いパーティーに参加するんですって。一緒に行ってみない？」男は中性的な顔をした痩せた男で、ボクに挨拶すると足早に外に出て止めてあった車のドアを開けると、ガラス越しに手を挙げてボク達を呼んだ。ボクと夫人は吸いこまれるように乗車し、男はドアが閉まるとスピーカーの音量を上げて猛スピードで走り出した。男の雑な運転にシートベルトで固定されているはずの夫人のずっしりとした腰がシートの上で不安定に浮き上がった。沈んだりしている。「ジェットコースターに乗ったのかしら」と微笑む夫人をミラー越しに男が見てにやりと笑った。どこに向かっていくかもわからないまま、車の揺れと車内に流れている奇妙なリズムの音楽のせいで変な高揚感に包まれていると、男が突然「見るよ、あれ」と言っただけ先にある大通りを指差した。遠くに見える色とりどりのビニールボールが一斉に転がってくるような様子のそれは、よく見ると無数の人の大群だった。やけに派手な格好をした何千、もしくは何万の人々が隊列を組んでこちらに歩いてくる。「昨日ホテルのバーで会った人に聞いたんだけど、あまりにこの街に人が来るものだから住民がデモをしてるって」男が上擦った声で言うと、夫人が「まあ、すごい数！」と窓に顔をつけて子供のようにはしゃいでいる。あつという間に群衆は近づいてきてドラムやラップ、ギター、笛、様々な楽器を使って凄まじい音量で波のような音の洪水を切り一面に放出していた。通りを挟んで両側に車が何台も立ち往生してしまい、車外に出てデモに参加したりパーティーと勘違いして騒ぎ出す者もいた。シユプ

レヒコールが地鳴りのように街全体を震わせて、人々の熱気を誰も手の届かないような所まで押し上げていく。

かなしみを！

うけいれるな！

かなしみを！

ゆるさない！

涙を流す人物の上に赤い大きなバツが描かれた紙やプラカードを左右に振りながら練り歩く人々の数は増え続け、通りいっぱいにならない程に膨れあがった。しばらくして男が「これは渡れそうもないな」と少し苛立った様子でハンドルを軽く両手で弾いた。「終わるまで待つしかなさそうですね」ボクは窓の外を行き交う人の動きに目が回りそうになりながらミラーを覗きこんで言ったが男の顔は見えなかった。数秒だったか数分だったか、それとも数時間だったか、ボク達は無言でただじっとしていた。急に男がスピーカーの音楽を切ったかと思うと、何かを決心したかのようにアクセルを踏み込んだ。車はエンジン音を上げながら人の群れぎりぎりまで進むと、すべての音をかき消す程の大きな音のクラクションを鳴らしながら、そのまま人の群れに突進していった。男を止めようと身を乗り出したその瞬間、突然時間が止まったように周囲の音が一切消失し、無音のまま景色が静止した。ボクは蠢く人々の顔が皆一様に無表情であることに気づいて血の気が引いていくほどの恐怖を感じた。咄嗟に目を瞑ってじっとしていると、これは夢かもしれないと思えてきた。強く眩しい光の中に体ごと突っ込むような感覚を覚えまぶたを開けると、辺り

は真っ白だった。

「ぼくはかなしい」

ぼくは大きな声で言ってみた。すると言葉は空中を舞って運転席にいる男の口の中に入った。男は突然泣き出し、「こんなのもうたくさんだ！」と言ってハンドルを握りながら、

「かなしくてたまらない！」と叫び、さらに大きなクラクションを何度も何度も鳴らして人の群れの中に突進していった。夫人は固まったまま体を硬直させてただシートにしがみついているだけだった。プラカードを持った一人の女がシュプレヒコールを叫びながら車の方へにじり寄って来るのが見えた。

かなしみをうけいれるな！

かなしみをうけいれるな！

「お願いだ、近寄って来るな」男は避けるように左へハンドルを切った。するとフロントガラスに触れるほどの近距離で、

かなしみをゆるさない

と書かれたプラカードが現れた。男は「ちくしょう！」と思い切りアクセルを踏み込んで一気に右へとハンドルを回した。するとすぐ先に現れたのは、人でもプラカードでもなく、コンクリートの柱だった。男は両手を挙げて「惨

敗だ！」と言ってミラー越しにちらりとこちらを見た。男の表情は無表情だった。車は一直線に柱に向かって進み、太く堅い灰色の塊がすぐそこに立っているのが見えた。体の表面の空気が一瞬にして重くなり、人形のように四肢を投げ出したまま脱力して一瞬宙に浮いてから、体が隅々まで痺れるのを感じた。想像を絶するほどの力を加えられた衝撃が体の芯まで達した時、くすんだ灰色の、何も無い景色だけがぼんやりと広がった。金属が焼けるような匂いがあり、ずっと遠くにひとつだけ小さな光が揺れているのを感じ、じっと見つめた。ゆっくりと意識が剥がされていくような感覚を覚えた時、ふと痺れる手を動かしてポケットに手を入れた。あの丸い機械を震える手のひらに乗せて、口に入れて唾液と一緒に飲み込んだ。ボクの心臓はゆっくりとピクトを刻み始めた。

(了)